



# 坂江渉編著『神戸・阪神間の古代史』（時評・書評・展示評）

渡辺，伸行

---

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 4:104-110

(Issue Date)

2012-08

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81004259>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004259>



## Current Topics &amp; Reviews

# 坂江渉編著 『神戸・阪神間の古代史』

渡辺 伸行

本書の刊行意図は、「はじめに」でものべられているように、近代以降の比較的新しい町と想われている阪神間の歴史を、遠く古代とそれ以前の弥生時代まで遡り、神戸と芦屋、六甲山と有馬、尼崎と猪名川流域、西宮と武庫川流域の四地域に区分し、それぞれの地域の古代史の課題を取り上げ、主要な論点を短文で紹介したものである。その数は、総論を含め全体で三三論考に及ぶ。

本書は先に（二〇〇七年）刊行された『風土記からみる古代の播磨』の続編とも呼べる書物で、対象地域を西摂津の神戸と阪神間に絞り、研究課題が論述される。執筆者八人のうち、六人が前記『風土記からみる古代の播磨』の執筆者（坂



坂江渉編著  
『神戸・阪神間の古代史』

神戸新聞総合出版センター  
2011年4月発行  
B6判 307頁  
税込1,680円

江渉・井上勝弘・古市晃・松下正和・高橋明裕・毛利憲一）であることも、その感を強くする。今回は古代史研究者の中村聡氏と考古学研究者の森岡秀人氏が加わった。

内容的には、歴史を学ぶ学生や地域史に興味を持つ層を読者として想定し、地域の歴史研究の課題となるテーマを取り上げられている。執筆者に、文献の研究者に加え、新たに考古学研究者が加わることで、地域に根差す具体性のあるテーマも取り上げられ、豊かな内容となっている。

全体を通読すると、西摂地域の五世紀以降の歴史的位置を考えさせる構成となっており、ヤマト王権の朝鮮半島進出と深く関わることで、この地域の歴史が形成されてきたことを明らかにしている。翻って考えるならば、弥生時代以降の地域の自立的発展は、この地域では、何故不可能であったかと

いう問題に到達する。この問題はこの地域の古代史を研究する上で重要な課題であり、歴史研究者が共に解決しなければならぬ課題であろう。

本書の中には、葦屋菟名負処女が巫女であつた可能性や、古代の浜辺で行われた歌垣、阪神の浜に上陸した海亀の話題、古代の有馬温泉の草創期や湯治に利用した人々の名、古代の遺跡の地震痕跡や記録上の地震災害、山岳寺院である摩耶山天上寺と西国巡礼など、歴史の裾野の広さを示す楽しく読める論考も添えられている。古代の国郡里の制度や考古学（古墳や銅鐸など）の基礎的知識を得るための解説もあり、読みやすい内容となっている。

#### 主要論考紹介

西摂地域を猪名川流域、武庫川流域と六甲山南麓に区分することは、古代の立郡とも一致しており、妥当なところである。それぞれの郡成立のもととなった、地域の発展の歴史とその特徴が『記紀』に記載する伝承や万葉集・神社仏閣の由緒、考古学的な遺物、遺跡を資料として、論述される。研究資料の比較的多い地域と研究の関心状況から、神戸・芦屋と猪名川流域の論考が多くなるのもやむを得ないが、これらの地が五世紀以降の倭国の歴史で果たした位置を考慮するなら、首

肯されるところである。それでは、本書の章立てに添って、各地区の課題について考察した主要論考を紹介しよう。

第一章「神戸と芦屋」で取りあげる菟原郡と八部郡の芦屋・神戸地区は、畿内と西国を結ぶ海上と陸上の交通路と密接な関係を有する地区である。

本章では、古代の西摂地域が自律的に存在していたのではなく、倭王権の四世紀末以降の大陸進出の過程で、ヤマトと密接な関係性を結ぶ地域として発展したことが語られる。

冒頭で海人が取り上げられるが、海人は当地域を特徴づける有力な集団で、このために、当地域が古代倭王権との接点が生ずることになる。海人については、資料の制約もあり実態が不明だが、阪神間から淡路にかけて沿岸部の遺跡の存在や製塩土器、蛸壺、釣針などの出土から、その存在は想定されていた。本来の生業である漁業と航海から倭王権により、津の管理を委任され、贄の貢進、航海術にたけた水軍として編成され、海人が包摂されていたと解される。

倭王権は在地勢力を支配下におくことで、贄の貢納義務を負わせ、軍事的に編成し、在地集団が信仰した海の神を、住吉大社の分祀という形で取りこみ、同一祭祀を通して精神的な一体感を共有させることで、ヤマト国家の成員という意識

を育んだのだろう。

明石市魚住の住吉神社、高砂市の高砂神社、神戸市垂水区の海神社などは、元来は海人が信仰した土着の神々だった可能性が高い。それを津・泊・浦などを整備することで、倭王権が支配者側に取りこんでいったものと推定される。

住吉大社は、航海の安全を祈願する海神ではなく、倭王権の国家的守護神であったところに、分祀の意味があったと坂江氏は指摘する。大阪湾から播磨灘にかけて数多く存在する住吉神社の由来を説く魅力的な説である。

もう一つの大きな課題は、西撰への倭王権の進出時期である。それを探る論考が井上氏の「葦屋の乙女と茅渚男」である。

西撰地域と和泉地域のつながりが、倭王権の朝鮮半島進出頃から活発になり、葛城氏を同祖とする布敷氏や的氏の氏族が西撰に進出したことを、地名から考証される。確かに菟名負処女伝説と関わる東求女塚古墳には、和泉砂岩が石室に使用されていることから、四世紀初頭には、和泉地域との交流が想定される。一方、西求女塚古墳や処女塚古墳からは、日本海側地域との繋がりが推定される土器や埴輪が出土している。これを見れば、三世紀後半から四世紀初頭には、倭王権に参加した日本海地域の豪族が菟原地域に進出している。

王権が朝鮮半島との窓口とした津は、大津道の延長上にある和泉開口神社付近だという説は、この当時の状況を推察すれば妥当性のある考えであろう。

これに関連して、葦屋菟名負処女伝説が神に仕える巫女をめぐる民衆の悪口伝承に起源があるのではないかという坂江氏の説も興味深い。その伝承の背後に共同体の人口維持の機能を担った歌垣の存在に注目するなど、民衆歌謡のかくされた意図を読みとる手法は、民衆生活が歴史研究の対象とされることは少なかつただけに、注目される。

古墳時代から奈良時代にかけて、神戸を代表的する港は敏売浦である。西求女塚古墳がまさにその津を睥睨するように、東側に築造されていることから、三世紀から主要な港であつた可能性は高い。

この敏売崎で行われた特殊な外交儀礼について、坂江氏が紹介している。難波館と敏売崎で酒、肴を給する行為は、穢れを払う儀式という説より、共食により倭国の成員を迎える行為と解釈され、ヤマト国家への臣従、服属の証として位置づけられるという。何故敏売崎が選ばれたかについては、この地が神聖な崎であり、畿内の西端に位置する地理性だと解

釈される。当時の畿内意識を反映するものであろうか。

行基が修築、整備したと伝えられる摂播五泊がいつの時期から津として機能していたかは、今後検討される余地がある。しかし船の航行能力の発達や河川の堆積作用による機能低下とともに、津は変更されたと推定される。特殊な外交儀礼の場となった敏売浦も奈良時代後半には、大輪田泊にその地位を譲ったことが、近年の兵庫津遺跡第三二次発掘調査で明らかになっている。

もう一つの交通路、陸上路では、山陽道がこの地域を東西に貫通する。葦屋駅家について、森岡氏は古地名考証から葦家駅家の比定地は、前田遺跡であり、「厩田」が「前田」に転訛したと考える。しかし、神戸市の深江北町遺跡からは、馬歯の出土や「駅」墨書土器や瓦の出土、時期は下るが平安前期の承和年間の「惊人稲継」と書かれた木簡が出土しており、同遺跡が駅関連施設であったことは間違いないであろう。深江北町遺跡は、先の調査では掘立柱建物が存在するのみで、播磨国内山陽道の駅舎のように礎石建物はないが、未発掘地に存在する可能性、あるいは先行する時期の可能性も考えられる。

第二章「六甲山と有馬」では、信仰の対象とされた六甲山、

倭王権の中枢からみた六甲山、六甲から湧き出た湯と湯治を紹介する論考等が集められている。

一九六四年に桜ヶ丘銅鐸と銅戈が発見された場所は、通称神岡と呼ばれ、弥生人には聖なる場所であった可能性がある。桜ヶ丘遺跡のような山上の複数埋納と本山遺跡や北青木遺跡のように集落近傍の単独埋納との違いは、祀る対象と祀る集団の規模と生業の違いを表すと解される。森岡氏の指摘のように、弥生時代中期から後期の転換点で、銅鐸が埋納された歴史的意味は、その後の弥生社会の展開を考える上で重要である。なお、桜ヶ丘の銅鐸一四個、銅戈七本という二・一の数には、セットで使用された可能性も否定できない。

六甲山は花崗岩を基岩とする山であり、南麓には花崗岩巨石が存在する。こうした巨石を信仰の対象とすることは、古く弥生時代には始まっており、甲山や保久良神社から銅戈が出土していることは、よく知られた事実である。越木岩神社など稲作農耕を基盤とする麓の村々の豊穰祈願が、神の依り代としての磐座Ⅱ巨石崇拜になったという坂江氏の指摘は、山上の遺跡と山麓の村を関係づける示唆に富む説である。

淀川以西の地域が五世紀まで武庫の国と呼ばれ、継体朝以降、空間的にも倭王権の支配領域に取りこまれ、「むこう側」

でなく、王権を構成する地域に変貌したことを、地名呼称から類推した説は興味深い。この地域が王権の身内化するなかで、七世紀には新たに摂津という国に編成されるが、他の論考でも指摘の通り、まさに「津を摂る」国として編成されたと理解できる。

一方、古代からは離れるが西国巡礼道の途上の参詣地として、神戸の寺々に人々が訪れていたという事実は、興味深い。密教系寺院の天上寺が建立された摩耶山には、西国巡礼者が登頂し、参拝者も多かったことが紹介される。

第三章「尼崎から猪名川をさかのぼって」では、猪名川流域の課題がいくつか取り上げられる。この地の主要な課題を列举すると、猪名湊と猪名部、王族との関係、僧行基、東大寺領猪名荘、白鳳期の古代寺院である。猪名川の河口には、『万葉集』や『記紀』の記述から猪名湊が存在した。しかしその位置はまだ押さえられていない。猪名部はその港の管理と木工、造船に深く関わる渡来系民であることが『書記』の伝承等から語られる。その職掌からみて、猪名川の上流から河口まで、猪名部の勢力圏であった可能性が高い。

尼崎に残る立花、額田、穴太、雀部などの地名は王権に関わる名であり、王族の宮がかつてここに存在したことの証拠

とされる。地名を『記紀』の王族と比較考証した古市氏によれば、その時期は継体朝以降、為奈とよばれたこの地に宣化天皇と后妃大河内稚古媛の子の王宮が設定されたことに始まり、為奈の地が王権と結びつくのは六世紀だとされる。

尼崎が実は砂州の上に発達してできた町で、阪急沿線武庫之荘から阪神沿線南部にかけて、それを裏付ける四列の砂州痕跡が確認されている。干拓により徐々に土地が拡大し、砂州の先では、海人による祭祀が行われてきたことなどが紹介される。

こうして発展した尼崎に、奈良時代になると東大寺領猪名荘が置かれ、その位置がJR尼崎駅北にあつたことが阪神大震災時の発掘調査によつて解明され、猪名荘の発展とともに、浜も開発が進み、大物・長洲・杭瀬の浜に分化し、中世以降の尼崎の町が生まれたことが明かされる。

この地域で忘れてならないことは、行基集団の猪名野における活動である。古市氏が述べるように、伊丹台地に池溝を開発し、耕作田を増やし、布施屋を設けて、給孤独園を設置し、旅人や困窮した民の救済にあつた。奈良大学の坂井秀弥氏の研究によれば、伊丹の天神川と天王寺川は、行基が開削した昆陽上溝、下池溝の水路にあたり、昆陽上池が現在の

昆陽池にあたるとされている。行基と猪名野との関わりが生じた背景について、筆者は行基が渡来系の人であり、多分に猪名部など渡来系の人々とのネットワークから情報を得ていたことと、昆陽の地が山陽道と有馬道が交差する交通の要衝で、人々が多く集まる地であったことにあると推定している。

白鳳期の西摂には三寺院が造営される。河辺郡の猪名寺廃寺・伊丹廃寺そして菟原郡の芦屋廃寺である。白鳳期に相次いで寺院が創建されたのは、この地の人々の倭王権との結び付きの強さを示し、いち早く中央に倣い、都の新文化を取り入れた人々の意思が感じとれる。猪名寺廃寺と伊丹廃寺の造営は、在地氏族の可能性が高く、芦屋廃寺は法隆寺と繋がる郡家寺院の可能性が指摘される。西摂寺院相互の間で、奈良時代末に剣状花文軒丸瓦が使用され、相互の関係が強まったという森岡氏の指摘も新鮮である。

第四章「西宮から武庫川流域へ」では、西宮の古地形が内陸奥深くまで湾入する海と武庫川と夙川の氾濫により形作られたことが紹介される。津門稲荷古墳等の存在により津門付近が武庫水門の場所であったと想定される。武庫水門は、住吉大社に次いで朝廷の崇敬を受けていた広田神社

により繁栄した。外敵や兵乱を鎮撫し、武庫水門を守護する使命をもった広田神社であったが、徐々に河口が埋まり、港の機能が低下する過程で、浜南宮であった西宮戎神社が山陽道の要所に位置したことから、次第に人々の信仰を集めていった。西宮の歴史は、港と神社の関係性から生まれた。

森岡氏が紹介する芦屋市三条九ノ坪遺跡出土の壬子（六五二）年木簡は、注目すべき木簡である。もちろん日本で第二番目に古い紀年銘木簡であるのみならず、古代の菟原郡で文字を扱う人がおり、その職務や文書行政の始まりなど、考察すべき課題が多い。今後の研究の進展が期待される分野である。

木簡で関連して触れるならば、西宮市高畑町遺跡奈良時代井戸出土の□国□郡方□郷木簡から、古代武庫郡の郡衙の位置を再考させる話題が提供された。

第五章「総論」では、古墳時代の西摂津の勢力、倭王権との関係、人々の暮らしを扱った三論考が寄せられる。古代の西摂の範囲は、時代により変化したと思われる。森岡氏は、西摂の古墳群を五区分する。三世紀に菟原地域の首長系列の古墳が築かれ、猪名川流域のグループはやや遅れ

て出現し、規模は小さく六世紀まで継続する。西摂平野全体では、宝塚市長尾山丘陵の古墳群や豊中市域の古墳群も考察の対象に含めれば、諸勢力のダイナミックな関係が見えてくる。次回は是非それを取り上げていただきたい。

文献に登場する西摂津の有力氏族は凡河内氏であるが、第三章で論じられたように、雄略朝の凡河内直香賜が初見で、西摂から北摂にかけて勢力を扶植していたことが窺われる。森岡氏は芦屋打出小槌古墳を香賜と関係づけるがその盛衰消長を、古墳や居館など考古学的な資料で辿れるか、考古学と文献史学の学際的な研究によりこの課題を解決することが期待される。

本書の「あとがき」で坂江氏が述べるように、西摂地域は地形的に多様であり、その多様な土地で織りなされた豊かな歴史や文化が築かれたと思われる。摂津が一地域として単独で存在したのではなく、古代の王権との密接な関係の中で、この地域の歴史が展開したことを、この書物は我々に教えてくれる。本書は大阪湾を全体として見る目が、実は古代の西摂地域の人々の視点でもあったことに気づかせてくれる貴重な書である。本書が西摂の地域史に関心を寄

せる多くのの方々の目に触れることを切望して、拙い書評を終わらせていただく。